

## なの花びより

千葉県市原市 丸 房代

はじめに

更級日記は菅原孝標女が書いた回想録として知られている。上総の国から都への旅の物語から始まり、その旅の最初が市原市と  
いうので、市民の関心や親しみもひとしおである。自分の目で見、  
耳で聴き、体験した喜怒哀楽を素直に表現していて共感できる。  
くしくも、彼女の四十年の日記と、私の四十年の嫁の歴史が同じ  
長さであり縁を感じる。私も刺激を受け、市原市のほんの片隅に  
住み、体験した暮らしを書き遺せたらと思いついた。他所から  
嫁し、家の嫁として暮らし、義母から学び、この地に根を下ろし  
ていく過程を、村のさまざまな行事を通して綴ってみよう。

私の結婚した昭和五十年代は、まだ家から家へ嫁ぐという意味  
合いが強かった。夫の家に嫁ぎ、村の嫁ごとになっていく私の体験  
記である。私の身に覚えた伝承は、次代へと継ぐべきだが、今は  
叶えられず、息子夫婦は、もう少し便利な場所で暮らし村に戻る  
ことはない。新しい嫁は、もうこの村に来ることはない。私や、  
その前の義母たちや、もっともっと遠い昔、この村に嫁いだ女性  
たちが、体験し馴染んだ村の暮らしについて、ささやかな記録を  
書き進めよう。

市原市は千葉県の中でも面積の広い市で、西側は東京湾に面し  
コンビナートを有する。南部地域にある我が村は、南側とはいえ  
丘陵地帯であるため、市街地から比べ二、三度気温も低く、稀に  
雪の降るところである。里山と呼ばれ、人口減少の著しい高齢者  
率の高い地域でもある。

昔、加茂村と呼ばれたこの地は、最後に市原市に統合され、里  
山という環境を生かし、今では市の観光地区に指定され、市原市  
の癒しの場所となっている。鉄道沿線になの花が揺れ、無人駅に  
は桜が満開。撮り鉄や、にわかカメラマンが押し寄せる。私の第  
二の故郷である加茂へ嫁ぎ、義母に習い、村の付き合いや慣習を、  
ひとつひとつ自分の暮らしの中へ落とし込んできた。幸せなこと  
に、私は義母からさまざま丁寧に教えてもらうことが出来た。家  
と家との繋がり、また折り合いの悪い家どうしのこと、子育ての  
コツ、郷土料理の作り方、食べ方。村の嫁ごととなった私にはどれ  
も貴重な教えであったが、この体験を継ぐことはなく、私の嫁に  
は伝えられない。こうして筆を起こして書き記すことしかできな  
い。

### 結婚の記

結納が済み、婚礼の二ヶ月くらい前の大安吉日に嫁入り道具を  
婚家へ届ける儀式がある。花嫁の用意した荷物を、花婿の家へ運  
ぶのだ。大型トラック二台、業者を依頼し、荷物の上には唐草模  
様の風呂敷きを掛け、婚礼祝いの荷として運ばれる。

荷の内容

桐箆筒三棹 和箆筒・洋服箆筒・整理箆筒鏡台・夫婦蒲団・客蒲団・夫婦座布団・客座布団・電気製品・いわゆる白物家電という生活必需品、冷蔵庫、洗濯機、オーブン、掃除機。自転車も荷のひとつだ。

着物は、黒留袖・喪服・訪問着・小紋・紬など。婚家へ、午前中に運び入れることが吉例とされ、慎重に確実に素早くと、運送業者も気を遣う。夫の家では業者にお礼のご祝儀を用意する。運び入れが済むと、実母と私は箆筒の中に、着物、洋服、その他の衣類をきっちり納める。その間に、夫の家には招待客が集まりだす。花嫁花婿の両父母、両家の仲人ご夫妻。婚家で用意した料理や祝い酒で客をもてなす。

翌日、近所の女性たち、数人が連れ立ってやってくる。婚禮道具一式を見物するのだ。口々に品定めするように、少し斜め上からの目線で始める。品物を褒めながらも、箆筒の中の粗を探るようにして、全ての抽斗を開け、それごとに感想を述べ、皆で意見を共有していく。嫁の私としてはプライベートなどまるで無く、なぜこんなことになるのか全く聞かされていなく、訳のわからぬ腹だたしさと恥じらいで、顔を赤くしながら、柱の影でこの見物が一刻も早く終わることを願っていた。皆、それぞれに表立っての悪口は無いが、「昔とは違ってきたのね」などと遠慮が無い。一時間ほどの見物が終わると、今度はお茶とお菓子の接待。「よろしくお願いします」を連呼しながら、義母の後ろを付いて給仕

をする私。村の嫁この始まりだ。

結婚式の形態も変化し続けている。今から七十年程前、私の親が婚礼をした昭和二〇年から三十年頃。結婚式は家で行われ、仲人が花嫁の家へ赴き、花嫁行列をしながら花婿の待つ家へ到着する。行列は、馬車や舟、あるいは歩いて行き、花婿の家で挙式、披露宴となる。三日ほど宴会が続く地方や、銚子の漁師などは一週間も続けると聞いたことがある。私の記憶にある花嫁さんは、仲人婦人に手を引かれ、実母などが付き添い、婚礼衣装で近くのお宮に詣でる。近所の子供たちはその花嫁さんについて歩き、自分もいつかきつと花嫁さんになって、あんな綺麗な着物を着るんだとはしゃいだものだった。選ばれた七歳の男女児が正装し、花嫁が婚家の玄関に入る前の儀式を行う。箆筒のようなもので花嫁の尻を叩くのだ。この家から出て行かぬようにするためだと義母に聞いた。義母もそうしてこの家に入ったのだろう。

私の結婚は昭和五十五年春、弥生三月なの花の咲く頃。自宅での挙式や披露宴はなくなり、式場で行う時代だった。会場にスモークをたいたり、新郎新婦がゴンドラで会場に降り立ったり、衣装替えも三回、四回と演出はエスカレートする世の中だった。大宴会場を予約し数百名の客を招待する。披露宴の間、新郎新婦は何度も着替え、写真撮影で雛壇に座っている時間も無く、祝辞を受けるのは、後日ビデオ撮影されたものを観る時になる。恩師や先輩にはお車代を用意し出席の感謝を伝える。

組と呼ばれる村の最小単位のコロニーがある。村の暮らしてはこれが核であり、基礎となる。組内、「くみうち」と呼び、この

五ノ八軒は冠婚葬祭全てに関わりを持つ単位である。

この組内や親戚縁者の招待客は、婚家で用意したバスで会場に向かう。挙式、披露宴を済ませると、またそのバスで帰途に着く。組内の招待には男性が出席し、女性は婚家で留守居しながら、婚家当主の段取りにあわせ、料理や酒の手配をしておく。バスから降りた招待客は、婚家で祝宴の続きとなる。宴は夜通し続き、日を跨いでも灯りは消えない。

新郎新婦の私達は式場から新婚旅行に出発。私を実家への訪問を許されるのは、旅行が終わり、土産をもって、夫と共に挨拶に行く時であり、一刻も早く両親に会いたい私は、早くも結婚を悔やんだ。まず婚家優先、義父母を父、母と思い暮らすのだ。挙式後、三ヶ月を過ぎてやっと戸籍に入ることを許された。

村の慣習で、長男、いわゆる、倅といわれる家の跡取りの結婚は、家をあげて親類、知人、近所の方々に披露する。二男やそれより下の男子、また他家へ嫁ぐ娘の場合には、内々の祝い事として大袈裟にしない。組内の決まりで、オジといわれる二男、三男の結婚報告は、挙式を済ませた後、母親が息子夫婦を伴い粗品を持参し、組内を回り挨拶する。しかし、これも簡略化され去年中止となった。このオジ夫婦が、この村に新宅といって家を建てて暮らす場合には、夫婦ともども、組に仲間入りをして皆に承認して貰う必要がある。

私の結婚式から一ヶ月後、佳日を選び、組内七軒の奥さんたちを家に招き、花嫁披露をする。奥さんたちは午前十一時に打ち揃いやつて来る。組内で決まりの金額をご祝儀として持参する。お

料理は、義母自慢の祝巻き寿司、刺身、天麩羅五種、煮物七種類の数は縁起を担ぎ奇数にする慣わし)そしてこれも義母自慢のあんころ餅、寒天羊羹、漬物である。全て家で作って用意する。女性向けの優しいお酒やお茶でもてなし、一日ゆっくりくつろいで貰う。この日のお手伝いは仲人婦人である。私はただお人形のように着物を着せられ、じっと座り「ありがとうございます」「よろしく願います」を繰り返すばかり。花嫁について、仲人婦人から簡単な経歴や今の仕事などが発表される。質問には義母が答え、私は「はい」のみ。これからここで暮らす限り、この七人の奥さんたちとうまくやっていかねばならないと覚悟を決めた。まだ誰のことも、何もわからない。顔もまともに見られない。今日をもって婚儀の祝宴モードも終わり、本当の村の嫁ごの暮らしが始まる。今日の天気は穏やかなのに、後に嵐が控えているのはと不安だらけだった。

### 嫁の記

そういえば、実家の母も月に一度くらい、近所のおばさんたちとお茶飲み事をしていたように思う。何の集まりなのかよく知らずにいたが、これが子安講だったのかもしれない。義母から、明日は子安講の仲間入りだと唐突に伝えられる。家に新しく嫁を迎えると、それまで姑が子安講に参加していたが嫁に譲るのだ。

子安講は日本全国いろいろな地域に残っている慣習で、十九夜講とも呼ばれ、子授け、安産、子育てを祈願することが始まりの

ようだ。この村でも長い歴史があるが、農業の機械化などで共同作業が無くなり、女性の集まる機会が減ったり、村の嫁も結婚前からの仕事を続けたり、休日の使い方もまちまちになる中、女性たちは臨機応変に工夫しながら子安講を守り続けてきた。毎月何日と決めていた日程は、集まりやすい日曜日に。また、家々を回り番で宿を貸していたやり方を、村の集会所を使うことで気軽にし、料理も宿で用意せず皆の分担制にするなど、より集まり易くして、子安様に子供の安全を祈願した。

子安様は木花開耶姫「このはなさくやひめ」がご神体といわれるが、私の村ではご神体は無く、子安様の絵が描かれた掛け軸を飾り、お花、線香、それに私達と同じ料理やお菓子や並べ一緒に召し上がって頂く。

仲間入りの日は、義母が皆に紹介してくれる。お茶を勧められ、お菓子を出されても喉を通らない。その日は義母も一緒に最後までで過ごすので、体を硬くしながらそばにびったり付いていた。けれど、次からは一人だ。回り当番もこなさねばならない。他人の話に相槌を打ち、楽しんでるかを装うことは大変疲れるが、これも村の嫁ごの洗礼だ。それでも十年も経てば慣れたもので、皆と大声で笑い、子や夫の話もする。けれど、現在うちの村には新しい嫁はやって来ないし、子供を育て上げると、子安講は廃れる一方となる。月に一度が三ヶ月になり、年に一度が止めようという話になった。子安様のお陰でうちの子も元気に育ってくれた。村の子安様は、今は誰の目にも触れず、戸棚の中でぐるぐる巻きにされたまま、何年も眠っている。いつか村に子供が生まれたら

目覚めていただこう。

## 母の記

私は結婚した年に妊娠した。翌年の六月が出産予定であり、一ヶ月前に仕事先から産休を貰い、実家に戻り出産に備えた。この村では、嫁の第一子出産は、実家の世話になる里帰り出産が多かった。義父は、実家に戻った私のために一俵の米を担いできてくれ、実父によるしく頼むと伝えた。無事、男児を生んだ。この時ばかりは「でかした」と、皆から褒められた。生まれた子の一ヶ月検診が済むと、佳日を選び、私と子供は実父母と仲人夫婦に付き添われ婚家へ戻る。実父母は孫のため、祝いの着物、ベビーベット、ベビーカー、ベビー用品を揃えて、婚家へ送り届けてくれた。婚家では、私たち母子と実父母を迎えるため、夫側の仲人夫妻や親類の者、組内七軒の人たちと共に、料理や酒を用意し到着を待っていてくれた。

地方によると、この行事は「孫渡し」と呼び、実家から母と乳児を無事に婚家へ送り届けるという儀式であったらしい。子が生まれるとお祝い事が続く。お七夜、お食い初め、初正月、お節句、七五三。

子供の祝いは七歳の七五三の祝いまで続く。その度ごとに、親類縁者、組内の人たちをご招待し、一緒に成長をお祝いしてもらう。七つが過ぎると、仲人の役目も一区切り、組内を招待する行事も終わる。

男児が生まれると、その子の初めての正月に、弓矢や兜の飾りを、嫁の実家から孫に贈られる。子が元気に逞しく成長するようにとの願いを込めて。女兒の場合には押絵の付いた羽子板が贈られる。我が家は三人の男児だったので、実父は三人それぞれに祝いの兜飾りを贈ってくれ、三人の名前を入れて今でも大事に残している。

男児の五月端午の初節句では、家の中には嫁の実家から贈られる五月人形や兜飾りを、庭には棹を立てて、こいのぼりを上げる。幟が二本、鍾馗様の旗一本、こいのぼりの棹が二本。そのために、山の木を切り、皮を剥ぎ、棹の準備をするのは、祖父である義父の役目だ。義父は何ヶ月も前から山に入り、切り出し、皮を剥ぐ。すると、綺麗な木肌が現れ清々しい木の香りが溢れた。棹を立てるにも、家族だけではとても無理で、クレーンを使つての専門業者にお願ひする。その日も、こいのぼりやその他の飾りを贈ってくれた人たちと、立ち上がった棹や泳ぐこいのぼりを喜び合う祝い酒となる。うちの長男の生まれた年、この村には三人の男児が誕生し、それぞれにこいのぼりが上がった。三軒が競うように、色とりどりの鯉で空を飾つた。

令和に入った今では、この村に子供が生まれることはなくなり、現在四つの小学校は廃校となり、村でたった一つの中学校と統合され、市内初の小中一貫教育校となった。だが、入学してくる児童数は年々減少し、十人ほどになってしまい、すでに老人の村と化している。義父は天に昇るこいのぼりの如く、元気に逞しく育てと、毎日皐月の空に鯉を泳がせてくれ、五月五日には、お祝い

の宴を開き、親戚、組内を招き孫の成長を願ってくれた。義父の孫の可愛がり様は、本当に目に入れても痛くないというように、毎日毎日おんぶして寝かせてくれた。

夢中で七年が過ぎ、やっと来年は一年生という歳、七歳の子の祝い、七五三まで辿り付いた。その年を迎えると、村では、長男、長女の祝いを、特別な宴を開いて披露する。この地域では女兒も男児も七歳で十一月十五日に祝う。下の子も五歳、三歳の祝いとして、一緒に済ませることが多い。子供はこれまでの付帯でなく、帯をつける晴れ着で正装し、産土のお宮、高瀧神社にお参りし、御祈祷して頂く。写真一枚残っているだけの、昭和三十年代の私の頃とはだいぶ違う。

私の長男の祝いは昭和六十三年、結婚式並みに、盛大な祝宴を催す時代だった。宴会場で客をもてなし、引き出物を用意する。子供たちは雛壇に鎮座し主役となる。自慢の特技、歌や楽器、踊りの披露。最後には大人顔負けの来賓へのご挨拶である。この時代は、さまざまな祝ひ事が、全て大袈裟で華美に行われていた。平成から令和にかけ、自分らしさが求められ、華美の時代は終わつたようだ。

#### 伝承の記

仲間入りは女性だけでなく、ここで生まれ育つた男性もまた、結婚し一人前と認められると、父親の跡を継いで、町会の男衆の集まりに、家を代表して出席することになる。町会の会議に出て、

回り番の役員を引き受け、道普請や共同作業に参加して、村の中の地位を獲得していく。

町会で葬儀が発生すると、お悔やみに参列するだけの付き合ひもあるが、濃い仲間の組内に葬儀があると、男衆は亡くなった日から喪主宅で段取り一切の詳細な打ち合わせをする。日時、客の数、料理、僧侶の送迎、移動の車の手配、生花の数、墓堀の手配など、喪主の意向を聴き円滑に進める。数日は、喪主の家へ通うことになる。また葬列に必要な道具も作る。女の私は、その仕事を見る機会がなくわからないが、竹や和紙を使い行灯のような物や、五色の旗という飾りを作る。葬列者の額に付ける三角の白い布や、女性には真つ白な布で姉さん被りをしてもらうので用意する。

このような家での葬儀は無くなる時代だったが、一度だけ自宅葬儀を体験した。夫は男衆として働き、私は台所働きのすることとなった。真つ白な割烹着を付ける事が慣わしで、通夜から本葬後の精進落しの料理まで、女衆は台所で食事の世話をする。全ての客に料理を出し終わり、全ての片付けが済み、女衆の簡単な食事が済み、喪主から心づけを頂いて終了となる。若い嫁の初めての手伝いは、家の中での仕事はない。一日中、外の井戸で野菜を洗い、切り、鍋、釜を洗うのである。

精進落しの料理は、煮物、野菜の天麩羅、筑前煮、田舎巻き寿司、漬物など。生の魚は使わない。巻き寿司を、巻く技術のある女性は重宝される。私は今でもできない。客の料理のほか、喪主の家族の昼餉、夕餉も作る。家族は客の接待をする合間、座る暇

も惜しみ食事を摂るのだ。

自宅での葬儀は、二間続きの座敷を開け放ち、祭壇を設え、僧の読経に掌を合わす。焼き場からお骨を墓に納めたら、自宅に戻り、血縁の薄い者から順に膳に付く。家の中では一堂に会せず、数回に分け膳を作る。町会や、ほかの町会からの弔問客が一回目。酒や料理を頂き故人を偲ぶと、年嵩の者が「おつもり」を上げて、喪主に馳走になった礼を言い一回目終了。二回目は遠い親類縁者。三回目は親戚の者、そして、四回目に組の働きの男衆。この酒宴では、喪主や家族は酒を勧め、故人の生前のお礼を言い、人となりを語り合う。全ての客を送り出し片付けが終わると、働きの女衆がやつと座布団に座る。一日中の働きは思いのほか疲れた。

邪魔にならないことが新米の嫁の役目だが、喪主に代わり、若い嫁に声をかけ、指示するのは喪主の家と深い間柄の女性で、何もかも承知の経験豊富な人だ。葬儀の間数日は、喪主も口出しできない権限を持って取り仕切る。

現在の組内の葬儀は、男衆が斎場での受付役をする。香典を預かり計算して喪主に届ける。墓堀も無く石屋さんにお任せする。葬儀を取り仕切るのは、喪主の注文を聞く式場の職員である。女衆の仕事は無くなった。

忌日法要も今では自宅で行わない。ただ組内の者は施主に招かれ法事に参加する。以前家で法要をした頃、手助けしたりされたりの分家に、助っ人に行ったことがある。早朝に、施主宅で料理作りの手伝いをして膳を整える。客が集まる頃、手伝いの者もエプロンをはずし客となる。読経が終わると、僧も一緒に広間の膳

に付く。施主は料理や引き出物を用意する。自前の料理は、焼き魚、煮物、天麩羅、酢の物、ご飯、吸い物、漬物。ぼた餅は四十九日の法要には欠かせない。お赤飯を作ることもあるが、祝い事でないため、「白蒸かし」といつて、もち米を赤く染めず、白い状態で蒸し上げる。おおかた、組の法要には女性が出席した。香典は組の決まりの額である。二、三時間の宴の後、年嵩の女性から「おつもり」が上がりお開きとなる。若い嫁は余り、佛の席には行かず姑が出席していたが、嫁も古くなり、子も成長して母の後を追わなくなった頃、義母から私に引き継いだ。

女性の関わる町会の行事で彼岸念仏がある。お中日に、町会の集会所で年を重ねた女性、姑たちが集まる。我が家でも、義母はいつも佛のことは年寄りが出るもんだと、進んで参加していた。お祭りしているのは、天照大神だったような。神様をお祭りして、念仏を唱えるのもおかしい感じだが、昔からの慣わしと聞く。皆が集まると、地域に伝わる御詠歌のテープが流され、それに合わせ一緒に唱え合掌する。その後、世話当番が用意したお菓子や漬物で、村の小さな出来事など、あれこれ世間話の花が咲く。女性の集まりなので酒は出ずお茶なのだが、盛り上がりは酒宴に負けず笑い声は絶えない。この世話当番も回り番で、やるのは嫁の役目でお茶の給仕をして回り、お茶を飲むのは姑である。当番は、部屋の掃除から設え、茶菓子の準備、給仕、落ち度があつてはならない。天照大神の掛け軸の前にはお花、線香、お茶、お菓子を供えすることも忘れてはならない。

今ではもう、稲荷祭りと義母が呼ぶ、この祭りは行われていな

い。我が家では、毎年義母が亡くなるまで続けていた。村のどの家にも庭の一角に、石や木で作った稲荷様の小さな社をお祭りしている。お正月や地域の祭日には必ずお供え物をする。他市から嫁いだ私の実家でも同様に、稲荷様を家の庭に御祭りしている。毎年九月十五日、早朝、義母は台所で立ち働く。赤飯を蒸し、甘酒を沸かす。義母は稲荷祭りを「甘酒祭り」と呼んでいた。私が嫁いだ頃、義父の従姉妹に当たる大伯母二人が、毎年この日に打ち揃ってくるのだ。赤飯や甘酒で、義母と一日をゆつくり過ごす。ただそれだけで帰っていく。祭りの日が日曜でなく、私や夫、義父まで仕事で大伯母に会うことは滅多になく、いつも義母から詳しく聞かされ見たかに記憶している。義母が誰もやらないこの祭りを欠かさなかつたのは、この大伯母たちのせいだったろう。義母もまた若い嫁の頃、きっと大変な思いをしながら、祭りを自分のものにしてきたのだろう。大伯母のひとり、体調を崩してから訪問はなくなり、義母の心はほっとすると同時に、寂しさも感じたことだろう。

今年の九月十五日も、赤飯が蒸し上がると甘酒を添えて、庭の稲荷様にお供えする。義母が亡くなって五年。時々忘れる私で義母にすまないと思っている。

八坂神社と名のつく社は全国に多い。大小合わせ二千三百社。その総本社が、京都の祇園さんと呼ばれる八坂神社である。京都から全国に分かれそれぞれの地元で大事に守られてきた。村の八坂祭りは六月第三日曜日。高瀧神社の神主が祭祀を行う。町会の真ん中に鎮座する小さな社の八坂様。儀式に必要な酒一升、白米、

生魚、果物を供え玉串を奉納する。村の有志が集い祭祀を行って、村の無事を願う。男衆が参加しお祓いの後は、集会所で酒宴が開かれる。村の男は酒に目がなく集まれば必ず酒宴であるし、簡単に腰を上げない。

隣町の上総牛久にも八坂神社があり、歴史の古い牛久八坂祭りが大事に継承されている。江戸時代から続き、山車に乗った子供たちが奉納する牛久囃子は有名で、祖父や父も演奏した歴史あるお囃子だ。

また、今はなくなった村の行事の一つ、早苗ぶりとは田植えを終えた祝いである。農業の機械化が進み共同作業がなくなると、早苗ぶりも消えた。田植えがまだ手植えだった頃、女衆は何日も田植えの手伝いに、近所の田んぼに通った。長い時には一ヶ月も続くことがあり、毎日、腰を折り、冷たい田んぼに入り続ける重労働だ。長い作業を労うために、早苗ぶりを行ってきた。自慢の手料理を持ち寄り、陽気にしゃべり合う。共に汗を流した者同士、楽しい集まりである。そこに持ち寄る料理の一つに、「焼き米」というものがある。田植えの前には苗を作るが、種籾から芽を出させ、その芽を育苗する。以前は田や畑で育てた。現在は、適温に管理された機器の中で芽を出させ、ハウスで苗を大きくする。義母からは、このときに残った米を使い、焼き米を作ったと聞かされた。精米した米を研がずによく炒る。薄茶色に焦げ目が付くと柔らかく茹でた小豆と、米の半分の量の砂糖を加え普通に炊く。お赤飯のように見えるが、甘く、ぼろぼろしていて、お菓子のような。早苗ぶりの行事がなくなってからも、義母はよく作っ

てくれた。私にとって義母の大切な味である。義母の味は私の舌の記憶であり、その味は私が生き証人となり、再現可能となる。今では私の自慢の料理で子供たちにも食べてもらっている。

組内でも特に深い付き合いの家があり、本家と分家の関係となる。お互い、冠婚葬祭などでは、夫婦揃って手伝いに行く。私と夫は、分家の長男の結婚式に、名ばかりの仲人を務めた。昔からの縁で、お互いに仲人役をしたりされたりの間柄なのだ。嫁側も仲人を立て、古式ゆかしい結婚式が挙行された。結婚して五年目の、夫婦がなんたるかも知らぬ、未熟な私たちには荷が重く、それでも途中で降ろすことが出来ずにいた。「しっかりね」と肩を叩かれ任されるのだが、それは全権を委ねるといふのとは違い、全て義父母の言うとおりに動くことだった。雑壇の新郎新婦同様、こちらの夫婦も人形の仲人であったと思う。風習とは、危うくも古めかしいと切り捨てられがちだが、現在まで繋がっている伝承が物語るのは、私たちがこの地で生き暮らす限り、変化しつつも継がれて行くもので、明日には姿を変えられるかもしれない、生きているものなのだ。民族的智慧の結集ともいえる。

### 継続の記

この家に嫁し、村で暮らして四十年。四十回の春がめぐり、四十度のなの花を愛でてきた。つらつらと村の行事や慣わしについて記してきたが、思い返すに私が今あるのは、家族の支えがあったからこそと痛感する。一人きりで悩んでいるようでも、見守ら

れていたのだ。妻となり、子を産み、育て、親として成長してきつたつもりだ。市原っ子の子供たちを見守り、共にこの地を根っことして、心の支えにしていく。

子供は就学前までに、家族から離れ遊び友だちとの関係を築き、小学校入学の準備を整える。母である嫁も仲間入りをして、村の風習を覚え、村の人間として自分を認めてもらい、村の嫁ごとなる。親に口応えせず、親の声を天の声と思い日々暮らす。私が結婚した頃の多くの嫁は、そう思い、その通りに暮らしたことだろう。

私の義父母は古い考えの人たちでなく、嫁も外に出て自由に働くことに賛成していた。それは子供や家のためになると、縛ることなく応援してくれた。若い嫁の幼い考えもいきなり否定せず、しきたりを教えながらたしなめる事をしてくれた。私には納得いかない村のしきたりも存在したが、変えられないものは変えず、変えられるものは皆で変えていくと言われ、未来も見えた。家の中での意見の食い違いも、初めは泣きたくなかったが、この家を良くする為の道筋が違うだけで、目標としての到達点は一緒だと気づいた。それからは、世代の違う考え方も面白いと、余裕さえ生まれ、侃々諤々のやり取りも頼もしく感じ、この家の将来を思う熱さに嬉しくなったものだ。

私の結婚は自分で決めてここに来たのに、いつも心の中には、産まれ育った故郷があり、離れたことを悔やんでいた。村の生活は借り物に思われ、故郷と比べ、自分自身で溝を作っていた。この溝は仕事で外へ出ることで隠せていた。上辺はなんでもない顔

で、心底、市原の人間になったように振舞った。

結婚して十年目、気づけば私は一人。他の家人は、私の子供ですら、はつきりと市原の人間であり、この地がふるさとで大事にしている。私だけがいつまでも、ぐずぐず市原を受け入れられず仮面を付けて暮らしていた。ひとりだけ見つめる方向が違っていた。大事な家族と同じ方向を見るべきだと知った。それからは、市原市のことを何でも知ってやろうと、積極的に市のボランティアに参加し、市原人になろうと努めた。

訪問歯科医派遣のコーディネーター、高齢者送迎ボランティア、高齢者体操普及員、子育て支援など、真剣に取り組んだ。四十年の暮らして少しずつ、市原人になることが出来ている。それは上辺のことではなく、市原市をふるさととして愛し、大事に思う心を持つことだろう。村の嫁ごの私が、嫁を迎える年齢になり、私自身が子供たちのふるさとになるのだとも気づいた。義母がそうしてくれたように。新しい時代の子供たちの、代替地としての便利な土地では満たされないのが、ふるさとなのだ。私がこの地に暮らし続けることこそが、ふるさとになることなのだ。こうして、何代にも渡りこの村の嫁ごは、妻となり、母になり、姑になりながら、村の歴史を継いで来た。私もその歴史の中のひとりの嫁ごとして、村の一部になっていく。名もなき一人の村の嫁ごとして。

了